台大日本語文研究第 33 期
2017 年 6 月，頁 81-102
2017-03-13 收稿，2017-04-21 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.33.81

# 德富蘇峰的視角與台灣的記憶
## —以《臺灣遊記》為中心—

黃翠娥*

## 摘要

跨越明治、大正、昭和三個時期的日本最具代表性的媒體人德富蘇峰於 1929 年前來台灣旅遊一個月，並完成《台灣遊記》一作。蘇峰在來台之前書寫了「大日本膨脹論」、「台湾占領意見書」、「台湾」等與台灣有關的文章。這些文章的主旨在於強調奪取台湾對維持當時的日本國內政治穩定有所幫助，同時得到台湾對日本的南進政策也是不可或缺的手段。也因此，德富蘇峰在《台灣遊記》裡多是有關台灣的殖產興業上的觀察與提議。同時大力主張應該將台湾大學設立成以研究南方文化為重點的研究中心。這些發言雖然顯示了德富蘇峰的帝國主義的思維，但同時也提供給今日的台灣諸多借鏡。

與此同時，旅行當中或前往各地日本神社參拜，或批判台灣文化，這些舉動等可被視為是蘇峰的強烈的日本文化意識展現的結果。另外，《台灣遊記》當中提及前來台湾的諸多理由。換言之，對德富蘇峰而言，台湾不僅僅是處於日本南進政策中的重要位置中，透過對台灣的認識，也讓自己對自身的日本文化有更深的自覺，同時，台湾又具有個人療傷的功能。如此地，包含了多元意涵的《台灣遊記》，有仔細探究之必要。

關鍵詞：德富蘇峰、台灣記憶、台灣遊記、台灣形像

臺灣大學學術期刊資料庫

* 輔仁大學日本語文學系教授

# The Perspective of Tokutomi Sohou and the memory of Taiwan
## —Using《Taiwan Travel》 as the core —

Tsui-O Huang *

## Abstract

Tokutomi Sohou, the most representative media in Japan, which crossed Meiji, Taisho and Showa these three periods, traveled to Taiwan for a month in 1929 and completed “Taiwan Travel”. Before coming to Taiwan, Sohou wrote articles on "Great Japan Blooming", "Taiwan Occupation Opinion", "Taiwan" and other Taiwan-related articles. The main thrust of these articles is to emphasize that seizing Taiwan helps in maintaining the Japan's domestic political stability at that time, and at the same time seizing Taiwan is also an indispensable means towards Japan‘s southern expansion doctrine. As a result, in Sohou’s “Taiwan Travel” it is mostly about the observations and proposals on the Taiwan’s colonial industries. At the same time ,strongly advocated that the Taiwan University should be set up as a research center focusing on the study of the southern culture. These speeches again shows the imperialism thinking of Tokutomi Sohou.

At the same time, when travelling Tokutomi Sohou conducted speeches featured with Japanese history, or visited the Japanese Shinto Shrine, or criticized the Taiwan culture, these actions can be regarded as the result of Sohou's strong Japanese cultural consciousness. In addition, the “Taiwan Travel” mentioned the reasons for comings to Taiwan.

In other words, for Tokutomi Sohou, Taiwan is not just an important position in the Japan’s southern expansion doctrine, through the understanding of Taiwan, it also let himself had a deeper

* Professor, Department of Japanese Literature, Fu Jen Catholic University

臺灣大學學術期刊資料庫

consciousness of his own Japanese culture, while Taiwan also has the feature of personal healing. In this way, the “Taiwan Travels” which contains multiple meanings, has a necessary need for further study.

Keywords:Tokutomi-sohou,Taiwan memory,Taiwan Travel,Taiwan image

臺灣大學學術期刊資料庫

# 徳富蘇峰の眼差しと台湾の記憶
## −『臺灣遊記』をめぐって−

黄翠娥*

## 要旨

明治、大正、昭和に渡る最も代表的なジャーナリストとしての徳富蘇峰は昭和 4 年、一ヶ月ぐらい台湾旅行をして、『臺灣遊記』を書き上げた。蘇峰はその前に「大日本膨張論」、「台湾占領意見書」、「台湾」などの、台湾に触れた文章も残した。これらの著作では、台湾取得が当時の日本国内の秩序を保持するための重要な手段のほかに、日本帝国の南進政策にとっても欠けてはならない役割だと強調していた。このような蘇峰であるため、『臺灣遊記』においては、殖産興業に関する観察及び提言が大きな比重になっており、また、台湾大学の設立では南方文化を焦点とし、南方文化の研究所として、その特色を発揮させるべきというような主張を出したりしたのである。これらの発言からは蘇峰の従来の、帝国的な思想の影が見られると言えるだろう。

それと同時に、旅行中に神社巡礼とか、台湾の文化についての批判や提言などからは、「日本の自己表象」が読み取ることができる。さらに、『臺灣遊記』によれば、台湾に出かけた理由がいろいろあるようである。即ち、蘇峰にとっては、台湾の存在はただの日本の南進政策としての手段だけに留まらず、台湾へのまなざしを通して、自国の文化に対する自覚が蘇ったり、精神慰藉の対象になったりした存在でもあるのではなかろうか。このように、愛国者と旅行者及び文化人という多重角度を持っている蘇峰がまなざした台湾像を探究したいのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

* 輔仁大学日本語文学科教授

キーワード：徳富蘇峰、台湾記憶、『臺灣遊記』、台湾像

臺灣大學學術期刊資料庫

# 徳富蘇峰の眼差しと台湾の記憶
## −『臺灣遊記』をめぐって−

黄翠娥

## 一、はじめに

徳富蘇峰（徳富猪一郎、1863－1957）は明治から昭和にかけての日本の思想家､歴史家､評論家及び代表的なジャーナリストである。漢学の啓蒙を受け、兼坂諄次郎の塾に入り、熊本洋学校、東京英学校、同志社英学校などで勉学した。卒業を目前に同志社を退学、東京に赴いて、新聞界での活躍を目指した。が、まもなく帰郷した。明治 15 年（1882、19 歳)､「大江義塾」を開き、英語、歴史、経済、政治学を教授した。明治 19 年（1886、23 歳)『将来之日本』を出版し、腕力世界から平和世界へ、武備主義から生産主義へ、貴族社会から平民社会へと世の変革を主張した。その後明治 20 年（1887、24 歳）民友社を設立､『国民之友』を創刊し、自ら社長兼編集長を務めた。三年後､『国民新聞』を創刊する。明治 27 年（1894）日清戦争が始まった際､『国民新聞』は日本国民に日清戦争の戦況を伝達する役を担った。このような経歴を持っている蘇峰は敗戦に至るまで、日本国内の言論に大きな影響を与えた。

若い蘇峰は「平和主義」､「平民主義」を主張したが、三国干渉に絡んだ遼東半島帰還事件によって大きな衝撃を受けたようである。それ以来、理想主義からリアリズムへ、平民主義から帝国主義へと大きく転向し､『将来之日本』で描いた国家イメージから背離していった。[1]ついには、帝国日本の膨張政策の推進、及び大東亜戦争の完遂を期待する存在にもなった。[2]

このような背景を持っている蘇峰の台湾に対する注目は既に明治

---

1 伊藤彌彦『維新革命社会と徳富蘇峰』、頁 57。

2 徳富蘇峰「年表・徳富蘇峰の生涯」『徳富蘇峰終戦後日記「頑蘇夢物語」』頁 404-417、徳富猪一郎『蘇峰自伝』。

臺灣博碩士論文知識加值系統 臺灣博碩士論文知識加值系統 臺灣博碩士論文知識加值系統 

二十年代からである。明治 27 年に『国民新聞』に載せられた「大日本膨張論」と「台湾占領意見書」では既に台湾のことに言及している。また、同じ年の 10 月から 12 月までの二ヶ月間「台湾」を連載した。このように台湾のことに大いに関心を示した蘇峰はようやく 35 年後の昭和 4 年（1929）に台湾に足を運んだ。そして、この旅の見聞と感想として『臺灣遊記』[3]を残した。

蘇峰の台湾旅行についての先行研究は、それほど多くはないが、その中で、徐興慶による「近代日本における徳富蘇峰の思想『轉向』をめぐって」では、より詳しく『臺灣遊記』と蘇峰の他の著作における台湾領有論及び南方経営論などとの関連性を分析している。そして、蘇峰の台湾領有論は彼の帝国主義への「転向」した思想の一つとして貫いたものだと結論を付けた。[4]そのほかに、楊智景による「台湾表象の裏側のある〈日本〉探し一一徳富蘇峰『台灣遊記』からの示唆」[5]がある。この論文は蘇峰の目を通して見た、他者像としての台湾表象が日本の自己表象に変えられていくプロセスを明らかにするのを主旨とする。例えば、台湾の神社は日本の国家神道の総本山・伊勢神宮になぞらえて建造され、俯瞰の姿勢を持たせることで、一種の高揚感をもたらした施政上の裨益を収めるための装置だというように、日本の自己表象を追究している。神社のことに関連する資料には、近藤喜博が 1943 年に出版した『海外神社の史的研究』[6]（1996 復刻版）がある。それによれば、1930 年まで台湾島内の神社数は 30 軒もあったようである。蘇峰はその中の 13 箇所を訪問した。本発表では特に『臺灣遊記』を通して、徳富蘇峰のまなざした台湾のイメージ、さらに蘇峰の台湾観の形成の原因及びこの台湾旅行の意義について探究したい。

---

3 徳富猪一郎『臺灣遊記』昭和 4.7、民友社。日記風の遊記が 50 篇があり、また、20 篇程度の見聞、感想文を元にした「臺灣所見」という紀行文集も入っている。

4 徐興慶「近代日本における徳富蘇峰の思想『轉向』をめぐって」、『近代東アジアのアポリア』国立台湾大学出版中心、頁 317—332。

5 楊智景「台湾表象の裏側のある〈日本〉探し--徳富蘇峰『台灣遊記』からの示唆」、『人間文化論叢』第 6 巻、お茶の水女子大学　大学院人間文化研究科。

6 近藤喜博　大空社。

臺灣人文學術期刊資料庫

## 二、『臺灣遊記』の台湾像

蘇峰は夫人と同行で、昭和 4 年 2 月 5 日に東京を立って、翌日神戸から八千五百噸の新式船瑞穂丸で台湾に出発し、9 日にキールンに着いた。それから台湾一周をして、3 月 4 日にキールンを立って帰国するといったちょうど一ヶ月の旅であった。蘇峰の訪台は『臺灣民報』、『臺灣時報』、『臺灣鐵道』、『專賣通信』などの台湾現地新聞や雑誌に報道されたほかに、特に『臺灣日日新報』には、80 編ぐらいの記事が載せられた。例えば、2 月 9 日に到着するが、到着するまでの 1 月 25 日に「前國民新聞社長德富蘇峰氏は二月上旬発一箇月の豫定で臺灣に旅行し南北各地の風光史跡を探り三月上旬帰京の由」[7]という予告があり、蘇峰が門司で渡台の理由を述べたことが報道された。到着の日には「吾人は學人を明治、大正を通じての老記者、大記者として、また國民史の大なる修史家として迎ふるのを衷心より喜ぶ者である我が臺灣の官民は學人の史蹟蹈査の旅行に對して、其の目的達成の為に便宜と好意の最善を盡すべきである」[8]というように歓迎の意を表した。その後、毎日の日程、蘇峰の従来の業績、蘇峰の発言・講演さらに官民有志主催の歓迎会及び関係者の感想などが相次いで報道された。これらの報道から、蘇峰の訪台がいかに歓迎されたかが分かる。

蘇峰の旅程は各地の日本団体と交流し、名勝古跡を観光し、平地の小学校や蕃地の教育所、農業実験所、医療施設などを見学した。このようなほぼ一ヶ月の旅程からは、どのような台湾像が描き出されたのであろうか。

### （一）美景、健康地としての台湾

蘇峰は台湾の自然環境に極めて魅了されたようである。日本では珍しい亜熱帯、熱帯の植物を台北の植物園で接したのを愉快がっており、新店碧潭の風景を見て「宛も南畫景中に在る心地し」た。(「九

7 『臺灣日日新報』昭和 4 年 1 月 25 日、「德富蘇峰氏　來月上旬來臺」。
8 『臺灣日日新報』昭和 4 年 2 月 9 日、「蘇峰學人を迎ふ」。

臺灣大學學術期刊資料庫

新店遊賞)南投を、「狹き溪谷の窮まる所、洞門を過ぎ、端なく眼前に平原の展開せらるゝを見て、桃源とは斯る所にやあらんと、吾心を躍らしめた。」(「二一　日月潭」)とし、大林を「此邊背に青山を負ひ、其の兩側に修篁を帶び、小高き所に、赤く塗りたる門があり、其奥に屋根が出で、其の附近を竹笠を頂きたる農夫往來す。正に是れ一幅南畫である。」(「二二　大林」)と語った。また高雄西子湾では夕日を見て、「長風萬里我襟を吹き、落日は海波を射りて、其色黃金色より、深紅色に變じ、其の漸次海中に没するの光景、正に是れ一幅造化の大作と云はねばならぬ。」(「三三　臺南より高雄」)と楽しんでおり、屏東四重溪の温泉に入っては、旧暦十四夜であったため、「明月皎々碧天に懸り、蛙鳴、蟲聲四壁に滿ち、何とも名狀し難き快味を覺えた。」(「三五　四重溪」)と高く評価した。さらに蘇東坡の、「色同牛酪漿尤滋。形似甜瓜香更奇。艷說荔枝三百顆。坡仙此味不曾知」という荔枝に対する褒めを揶揄しながら恒春の木瓜(パパイヤ)の美味を絶賛した。(「三六　北上の途に就く」)旅程の終わりに赴いた宜蘭では、「(同県諸君が)台灣が真に久住の樂天地であることを立證したるは、予に取りて甚だ滿足の至りであつた。」(「四七　宜蘭」)と地元の環境の良さを肯定した。蘇峰が「はしがき」で台湾に遊んで最も意外に感じたことを五点述べているが、その第一に、「現時に於ては、思つたよりも健康地である事。」を挙げている。即ち、台湾の地理環境、風景、食べ物及び人間味などを満足に思っているようである。

**(二)誇りを持っている台湾建設**

蘇峰は日本人の手によって出来た建設を誇りに思っている。その中で、各建設についての紹介では、必ず建設経費について言及した。例えば、台北橋は延長239間鉄橋にして、工費144万円、工程3年を費やした。台湾総督府は工費333万余円、建坪2107坪だ。新竹から台中にかけての沙原を開墾地にした。また虎尾を、20余年前にはまったく一木なき荒原だったのを、人力の造化により大日本製糖会社まで出来た街を造り出したため、「天功を亮くるかを感じた」(「二

臺灣大學藝術期刊資料庫

四　虎尾」）と称えた。また、嘉義林業試験所の業績に対して高評価を与えた。阿里山での造林についても丁寧に記述した。「嘉南大圳」は大正 9 年から、昭和 4 年までのほぼ 10 年間の期間と合計 5351 万円の経費を使って、看天田を 15 万甲に、烏山頭の約 10 万甲に灌漑し、効果を収めているように紹介した。これらはすべて総督府の立派な業績だと高評価した。

さらに造林への重視も植民地政府の業績の一つに見ている。阿里山での伐木のことを紹介した場面では、「予は阿里山伐木を見て、たゞ木を伐るばかりが能事ではあるまいと考へたが、其の鐵道の沿線に、造林の行はれ、阿里山峰頭の伐木の跡には、新樹が、萱や篠の間から、其の亭々たる幹を出しつゝあるを見て、頗る人意を強うするを覺え」と植林のことに懸念を持つ。(「二八　阿里山概観」）烏山頭においても、森林のことについて木を伐るばかりではなく、切った片っ端から木を植えているから、日本人は偉いものだと称えた。さらに、阿里山のみならず、台北近郊の大屯山などの所でも植林の事業をやり続けていることに感服の意を表した。即ち、当時の台湾で開いた事業を高く評価したようである。

**（三）異文化との接触**

**1.カルチャーショック**

台北にある建功神社については、白蟻を防ぐために、木材の代わりにコンクリートを用いたことを、蘇峰は「神社の建物としては、如何にも不似合ひである」(「七　台北見物」）と指摘した。龍山寺の「紙銭」を焼いているのを息が詰まるばかりだとも指摘した。台南の孔子廟の祭典を見学した時の感想では、大牢、小牢の牲として、牛や羊や豚が、生のまま、血を流し、内臓を出して、壇前に供えられたことが残酷に見えたようで、来年から俑に改良すべきだ、どうしても肉が必要なら、肉屋から購うべきだと主張した。台南で虱目魚の養殖試験所を見学した時の感想では、一年の産出額が 200 万円以上であるこの魚に虱の字を冠するのは面白くなく、改名した方がいいと提言した。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

また、地元の婦人の身なりについては、「不思議な事が御座いまして、臺灣では下女であらうが、下等の婦人でありませうが、髪は奇麗になで付けて居りまして、花簪のやうなものを挿したり、或は腕輪を嵌めたりしてをります。非常に綺麗な風采をして歩いてをりますが、足を見ますと素足で御座いまして、實に可笑しいので御座います。」(十九　在住の人種と生活状態)と不思議に思っているのである。

**2.原住民文化の特徴**

特に生蕃の性格を分析した箇所では、生蕃は決して悪いものではなく、実に愛すべきものだ。生蕃は男女老少を問わず、みんな狩りに行く。それから、生蕃には立派な道徳がある。ご馳走であっても決して自分一人では食べない。お酒を飲む時も、子供でも、お婆さんでも、若い者でも、皆一緒に平等に飲む。知らない人が傍にいれば、その人にも飲ませる。蘇峰はこれらの習慣は美しい文化だとした。そして、生蕃の男は凛々しい顔をして、男らしい風采をしているとも賛美した。(「臺灣所見」--「十八　臺灣の生蕃に就て」)

**3.「民情悪化の話」**

蘇峰が新竹から台中へ行く途中で尾佐竹警察部長から「民情悪化の話を聞い」た。(「一八　新竹より臺中」)これはどのようなことか、蘇峰は「予も腹藏なく、現代政治批判の一斑を告げた」(「一八　新竹より臺中」)と一言を残しただけである。実は蘇峰の台湾行きは政治結社(1914-1927)と左翼運動(1927-1937)がもっとも活躍した、いわゆる非武装抗日時期に当たった。1915 年以降は、武力抗争の事件も少なくなり、特に 1919 年から、文官の総督が着任し、地方自治、総督府評議会、日台共学制度、共同婚姻制度などを行なうようになった。しかし、その代わりに、社会運動が増えてきた。1919 年に日本留学の台湾人学生が新民会を作ったことがきっかけになり、様々な政治運動や社会運動が起こるようになった。それによる代表的な機関紙には『台灣青年』(1920)、『臺灣』(1922)、

臺灣大學圖書館期刊資料庫

『臺灣民報』（1923）[9]などがある。とくに 1921 年に医師蔣渭水氏は青年学生と各領域のエリートを結束して、「臺灣文化協會」を設立した。それは後の台湾の民族運動、社会運動及び政治運動の大本営になった。1926 年に「台湾農民組合」、1928 年に「台湾工友総連盟」がそれぞれ成立し、そして、1928 年の 4 月に「台湾共産党」が上海に創立した。[10]

蘇峰が新竹から台中へ行く途中で尾佐竹警察部長から「民情悪化の話を聞い」た日にちは 2 月 14 日であるため、この日にちに近い事件は 1 月 13 日の「臺灣新民報社創立」と 2 月 12 日の「二一二大檢舉」であるが、特に警察官を悩ませた事件と言えば、何よりも後者の「二一二大檢舉」であろう。その経緯は以下の通りである。前述した「台灣農民組合」は 1927 年以降、左傾になる。それは内地人の独占的経営に対して請願したような平和的な手段から、次第に大型の示威抗議的な事件へと発展した。農民組合のリーダは更に日本に渡り、「日本勞動農民党」と交流し、日本の社会主義、共産主義のリーダの経験を吸収し、その勢力が次第に強くなった。そのため、1929 年 2 月 12 日に植民政府に「治安警察法違反」という理由で捜査され、幹部たちは逮捕され、投獄された。これがいわゆる「二一二大檢舉」というものである。[11]蘇峰が聞いた「民情悪化」というのはおそらくこの事件のことであろう。いずれにしても、蘇峰の記述からは当時の民情の動揺ぶりが窺えるのである。

## 三、『臺灣遊記』から見た蘇峰の思想

蘇峰は台湾旅行でさらに様々な台湾に関する観点を発表した。それは無論蘇峰の従来の「台湾領有論」にかかわっているのである。しかし、その中で、特に殖産興業主義、生産主義的な理念が中心的

9 その後、また『臺灣戰線』(1930)、『臺灣新民報』(1932)、『臺灣文藝』(1934)、『臺灣新文學』(1935) などが誕生した。

10 これらの団体の活動は三十年代の初期になって、植民地政府の弾圧を受けたため、衰えるようになった。

11 「領台以後的治安狀況」(『台灣總督府 警察沿革誌』台灣總督府警務局)、wikipedia「台湾日治時期」等を参考にする。

臺灣日本學術期刊資料庫

であると言える。以下いくつかの『臺灣遊記』に見られる観点を紹介しよう。

**（一）内地の資源供給地としての台湾**

『臺灣遊記』の「はしがき」で、「台湾は小なれとも、日本帝国の飛石である。帝国の発展は、此の飛石から始まらねばならぬ」というように、自国の発展にとって台湾がいかに重要であるかを語っているのである。早くも明治 27 年に発表した「台湾占領意見書」では「北方に鋭進すると同時に、南方の経営を閑卻す可らず。南方の経営とは、台湾占領を意味す。」と意見を述べている。このような思想を持っていた蘇峰は台湾に来て、当然、台湾の、内地への助力を気がかる。

「阿里山概観」で、日本帝国による阿里山の伐木採材の歴史に触れ、大正 3 年から始まって、年 15 万石の生産があると紹介した。そして、阿里山での伐木のことを紹介する場面では、樹齢 550 年、長さ 102 尺、その倒れる様は、実に巨人の最後を見るような勇ましく、凄まじくあるという。また、高雄で無数の汽船やジャンクが砂糖を日本へ運搬したり西瓜を東京に直送したりするのを目撃したという。また、嘉南大圳のおかげで、お米が大量に出来て、内地の食料問題にとっても、大きな利益になると述べた。蘇峰のこれらの記述からは、当時の台湾の資源が如何に日本に供給されていたかが分かる。無論、台湾は日本の植民地だったため、蘇峰の立場からすれば、日本へ供給するのもごく自然なことであろう。ただ、近代の日本の渡台の文化人の中で、蘇峰のように丁寧に台湾の物産の種類、数量及び如何に内地に供給するかを記述したのは、珍しいことだと言える。

**（二）内地人の経済的勢力を気づかうこと**

『臺灣遊記』の「はしがき」で台湾に遊んで最も意外に感じたことの第三点は「内地人と本島人との間に於ける勢力が、餘りに不釣合である事。別言すれば、思つたよりも内地人の本島内に於ける經濟的勢力の扶植が不足である事。」と述べている。また遊記の後半の「臺灣所見」で、次のように述べている。台湾の人口は 400 万人

臺灣大學學術期刊資料庫

で、その内 20 万は日本人で、鹿児島人、熊本人がそれぞれ 2 万人で、もっとも多い。しかし、この 20 万人の中には官吏、公吏、軍人等を除けば、実際に商売をしている人は少い。日本人の商売人は皆な困つている。なぜなら、商売の方はすっかり本島人のためにやられてしまったからである。その理由は本島人は生活費が安いため、よく「薄利多売」というやり方で商売をしているから、内地人よりも商売繁盛である。「矢張り滿洲に於て、支那人に負けてをります如く、台灣でも負けているので御座います。これはどうも甚だ困つた事で御座いますが、事實で御座います。」（十九「在住の人種と生活状態」）と語った。商売をする人口は確かに蘇峰が述べた通りであろう。実は、1920 年の日本人の職業別分布についての調査では、公職・自由業（35.10%）、工業（25.36%）、商業（18.08%）、交通業（11.07%）、鉱業（1.92%）、水産業（1.60%）、農牧業（1.19%）というパーセンテージになる。[12]官吏、警察などの公職業の人口が最も多く、商業に携わる人口はやや少ない。また、「公務員の人数が多い在台日本人社会では、在台日本人資本の累積条件が限られた」という状況も存在したようである。[13]しかし、総督府が日本企業の台湾投資を努めて勧誘したりしたため、本地の資本勢力がそれによって、不振になったりしたという理由もある。[14]さらに、経済的に圧迫された農民による示威抗議の事件も頻繁に起きている[15]ように、当時の経済状況は極めて複雑である。しかし、蘇峰は全体の状況の本質にはそれほど関心を持っていなくて、もっぱら内地人の弱い所に目を付けたようである。

### （三）原住民の耕作文化への指摘

蘇峰が原住民のことにも言及した。「四九　臺灣を去るに際し、若

12 「種族、體性及職業別人口（大正九年十月一日調）」「臺灣人口動態統計」、臺灣總督官房調査課、頁 0364。
13 檜山幸夫『帝国日本の展開と台湾』、頁 433。
14 涂照彦『日本帝國主義下的台灣 第 1 卷』、頁 535。
15 1912 年の林杞埔事件を例にしよう。総督府は今の嘉義、南投の竹山、斗六などの 15000 甲の竹林を模範竹林として国有地しした。そして、日本三菱造紙株式会社に所有権を持たせ、経営させる。それによって、2 万人の農民及び地主が生活に困っている状態になったという背景である。

臺灣日語學會論刊資料庫

干の希望を語る」で「第五は、蕃地の整理だ。今日の如く臺灣面積の四分の三以上を、十萬人足らずの生蕃人に一任し去りて顧りみざるは、餘りに無頓着である、而して生蕃人をして山を荒らし、水源を枯らし、若しくは洪水氾濫の素因を作らしめて、之を天災同様に諦むるは、如何にも腑甲斐なく、且つ無責任である。」と指摘した。

この、総督府に強く管理してほしいような発言は、最も合理的なものだと思われるだろう。確かに当時の原住民はよく 11 月頃から 2 月頃までの時期に山林を焼き払い、稲や雑穀、野菜などを栽培する。しかも肥料を施すことをしなかったため、三、四年耕作して、土地が衰耗したら、それを放棄し、更にほかの山林を焼き払って、新畑を開拓する。しかし、原住民は部族が多い。全ての原住民がこのようなやり方を取ったわけでもなかった。[16]花蓮港廳あみす族（アミ族）を例にしよう。この種族について「本族番人ハ既ニ農耕ノ時代ニ入リ、土地ヲ愛措スル事深キヲ以テ、耕地ヲ委棄スル等ノコトハ絶體ニ其例ヲ見ス。」[17]という記録が残されている。耕作方法は「舊畑は草木の繁茂に委し、他年地力の恢復を俟て其地を再耕する處と、又舊畑には造林して地方の恢復を促進せしむる處とあり、（後略）」[18]というように切替畑輪耕と造林の方法によって土地を利用したのである。即ち、土地保護の考えもしっかり持っているということであり、必ずしも蘇峰が指摘した「山を荒らし、水源を枯らし、洪水氾濫の素因を作った」という状況ではないようである。逆に原住民を苦しめた植民地政府の施策の一つは山林の過度開発ということなのである。したがって、蘇峰の見方は周到的なものだとも言い難い。[19]

---

16 『番族慣習調査報告書』臨時臺灣舊慣調査會 臺灣日日新報社 大正 4 年~6 年。

17 『番族慣習調査報告書』臨時臺灣舊慣調査會 臺灣日日新報社 大正 4 年 頁 30。

18 森丑之助『臺灣蕃族志第一卷』臨時臺灣舊慣調査會 臺灣日日新報社 大正 6 年 頁 347。

19 1895 年 10 月から総督府は既に「官有林野取締規則」を行い、自分の所有権が証明できない土地をすべて官有化するという規則である。さらに 1922 年から 1925 年にかけて、官有化された山林、野原を日本の資本家に売却した。

臺灣人文社會學術期刊資料庫

以上、蘇峰のいくつかの台湾観点は何によって生れたかと追究すれば、以下の原因が推測されるだろう。まずは、蘇峰個人の思想にかかわる点だろう。蘇峰の父親徳富一敬は幕末思想家横井小楠等と当時の実用的思想をかかげた「実学党」[20]のメンバーであり、活躍している。蘇峰は後、自由民権運動に投身すると同時に実学党にも近づいたため、国際社会にいる限り、兵力に依存するのではなく、殖産興業、貿易振興、教育の充実などによって実力を養うことが、「大義を世界に布く」第一歩だと考えていた。さらに、23 歳になったばかりで、未来に向っての日本の方向性がどのようなものであるべきかを示そうとしたものでもある、そして、畢生の出世作とも言える『将来之日本』を書き上げた。その中でアジアに迫っている欧米は武備主義のように見えるが、実は生産主義が先導しており、生産主義が最後の勝利を勝取るのは当然だというように、生産主義を実行し、国の富を構築すべきと唱えた。[21]その一環として、日本国内だけではなく、海外にいる日本人の経済力にも相当の関心を注いだ。『臺灣遊記』の「はしがき」で「意外に感じた」ことの第四は「内地人が、何れも臺灣に落ち付き居るのは、感心するが、餘りに落ち付き過ぎて、創業有為の氣分が、聊か鈍れつゝあるかの如く見受けられたる。」という観点であり、また、「臺灣所見」で台湾の六割の面積が八万人の生蕃にすっかり押されていくことを「甚だ働きが足りないのではないか」(「十八　臺灣の生蕃に就て」) という観点から、蘇峰の殖産興業主義、生産主義的な理念が存分に窺えるのであろう。

それから、もう一つの原因は、当時の多くの文化人が日本の各領有地に赴いた場合、招待してくれる対象はほとんど当地の日本の官

40 年代前半になると、蕃地の公有山林はすでに 99.9%に、野原は 97%になったという。(小島麗逸「日本帝國主義的台灣山地支配—到霧社蜂起事件為止」、戴國煇『台灣霧社蜂起事件研究與資料(上)』頁 65-66)。このように、多くの蕃人がつい山から追い出されたというひどい目に遭った。

[20] 朱子学を基本とした、殖産興業を重視した政治団体である。

[21] 杉井六郎『徳富蘇峰の研究』、藪田謙一郎『民友社とその時代——思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡——』などの資料を参考にする。

吏や県人会のメンバーや地元の有力者などであるため、下層にいる庶民の事情が分からないからである。蘇峰の旅行中の接触者もほぼ同じで、日本の官吏と県人会のメンバーと、員林の永靖庄庄長陳慶雲、鹿港の「台湾きっての名物男」辜顯榮、板橋の林家の林熊光とキールンの顔國年などのような地元の名望人､財産家ばかりである。このような人々からは本島人の実際の生活状況を知る機会は与えられなかった。実は台湾旅行の前に、蘇峰は何回か中国を旅行視察したことがある。特に日清戦争後の、明治 39 年（1906）及び大正 6 年（1917）の二回中国に旅に出た。そして、それぞれ『七十八日遊記』と『支那漫遊記』を書き上げたそれを見ても、当時交流した対象は日本人のほかにほとんどが当地の文化人、政治家であることが分かる。即ち、台湾旅行を入れたこの三回の旅の共通点は、旅の中では、庶民に接することはあまりなかったことである。

## 四、台湾旅行の意義

上述したような問題点が残っているにもかかわらず、蘇峰の台湾旅行はやはり深い意義があると思われる。無論､名高い『国民新聞』の元社長として台湾に足を運んだことは総督府だけではなく、熊本県人会を始め、当時の在台日本人を極めて鼓舞することになったのは無数の新聞報道から分かる。が、もっとも意義を持っていることは寧ろ当事者の蘇峰側にあるだろう。『臺灣遊記』の「はしがき」で「予は臺灣視察を主なる目的として、臺灣に遊んだのではない。寧ろ四十年來予が扶植し、予の公生活に取りて、不可分的國民新聞を去りたる胸中の懊惱を､此の旅行によりて慰せんが為めであつた。」（「はしがき」）と述べたように理由の一つは心の懊悩への慰めを求めるために台湾に出掛けたようである。「四　瑞穂丸船中」においても、「予が臺灣に遊ぶは、單に臺灣見學の為めのみではない。寧ろ内地を離れ、徐に心中の傷を療せんが為めだ。」と語る。台湾に到着した翌日に『臺灣日日新報』では、我が國民新聞を創立したのは明治二十三年で六十七歳の老齢に至るまで一生の仕事として終始一

臺灣大學藝術類研究資料庫

貫心血を濺いで經營して來たが今回出資者の根津嘉一郎と意見が合わぬので自分の創立自分の抱懐せる主義を以て自ら記事を書き且つそれで讀者を結びつけ四十五年間苦心經營して來た新聞を私が金が足らぬ許りで捨てねばならぬ破目となつたのは殘念至極である。(中略)東京にゐると古巣に戻つてくれとか、どうかしてやるとか私一身の將來につきうるさく同情されるので此の煩瑣から脱るべくいつそのこと此機會を利用して多年憧憬してゐる臺灣を見物して苦惱より來つた精神的疲勞を癒し心機を一轉しかねて聽いてゐた成功せる本島の治績文化の進歩を眼のあたり見且つ學ばうと想つて來た(後略)。[22]と詳しく自分の失脚の経緯及び台湾に来る目的を綴っている。そして、3月1日には台北で日本国史の特色について講演を行った。『臺灣日日新報』はその講演内容を「我が国史の二大特色/皇室を離れてわが国史なし　危険思想流行の原因は歴史教育の閑却に在る/　台北官民有志主催の歓迎会席上、徳富蘇峰氏の獅子吼」という書き出しで載せた。それに対して蘇峰は「とても獅子吼と申す程には参らなかつたが、諸君の芳情に酬いる一片の微意を看取せられなば、此にて仕合である。」（「臺北圖書館」）と返礼した。このように不本意で国民新聞社の社長の座から退かさせられて落胆はしたが、台湾での講演は大いに注目されたため、台湾旅行は大きな慰めになったであろう。そして、『臺灣時報』に「草山偶成　四首」という題で、「昨非不可追　明是不可期　擺脱是非意　隨緣又隨時　偶來蓬萊島　南北極津涯　送迎有知友　常春無四時　木瓜熟累々　芭蕉實垂垂　草山雲深處　緋櫻花滿枝　山中靈泉湧　亦足醫勞疲　人生行樂耳　古人不吾欺」[23]という詩を寄せている。その詩情には煩わしさから抜けて、台湾のよき環境、友情を存分に楽しんでいる様子が窺える。台湾旅行は蘇峰にとっては、単なる異文化体験というものではなく、どん底に沈んだ自分を元気付けてくれる存在でもあったのである。

---

22 『臺灣日日新報』昭和4年2月10日、「國民新聞を失つたなかしみ　きのふ來臺した蘇峰氏　しみ／〃＼と述懐」。
23 『臺灣時報』1929年3月。「文苑　漢詩」、頁119。

臺灣大學學術期刊資料庫

では、八十数年前のこの旅は今日の我々にとっては意味があるのであろうか。少なくとも台湾側から考えて有意義だと思われる。まず、「臺灣を去るに際し、若干の希望を語る」で、蘇峰は工業の発展、道路の修築などの重要性を指摘した。その中では、東西の連結のことについては第四点の意見として「東海岸は殆んど取り殘されてゐる。今日の臺灣は、云はゞ半身不隨の台湾である。されば如何に中央山脈は、高峻險隘であるも、何とか之を貫通して、西東兩岸を、陸路から聯絡せねばならぬ。」というように語った点が挙げられる。無論、「東西横貫公路」はすでに植民地時代から「理蕃警備道路」として開発されつつあり、その後、台湾政府はさらに力を注いで工事を進めた。しかし、今日の台湾は蘇峰が言った「半身不隨の臺灣」という状況からは完全には抜けていないとも言える。即ち、これらの指摘は今日になっても有意義だと言える。また、以下の二点においては今日の我々に大いに示唆してくれるものがある。

『臺灣遊記』には台湾の物産及び地理環境は内地に甚だ有利だと随所に書いてある。実は明治 27 年（1894）に書き上げた「台湾占領意見書」においては、すでに国防上よりも、通商上よりも、植民上よりも、いわゆる軍略の上においても、商略の上においても、戦争においても、平和においても、台湾の存在の重要性は論を俟たないと台湾の地理的な条件の重要さを強調した。『大日本膨脹論』の中でも、台湾の地理的な位置は帝国日本にとっては、南進政策には欠かせない存在だと語っている。海上に孤立した小さい島としての台湾は今日こそ、自分の地理環境をどの程度自覚し、どのように国際現勢に合わせて自分の有利な所を生かすかを蘇峰の主張によって、改めて思慮させられるのである。

それと関連があるが、蘇峰は「臺灣大學の設立は、少なくとも南方文化の焦點とし、南方文化の研究所として、其の特色を發揮せねばならぬ。之を一般的の大学たるに止らしむるは、是れ屋上屋を架するの類のみ。」（「四九　台湾を去るに際し、若干の希望を語る」）という提言もした。無論、南進論は日本では、既に 1880 年代に提唱

臺灣大學藝術期刊資料庫

されており、その後、台湾を拠り所にして、積極的に南進計画を実行していた。即ち、蘇峰のこの提言はまさしく日本政府の既定計画に沿って出された提言だと言える。ただ、蘇峰の主張は大学の方に軸足を置くことで、南進をめぐる各方面の研究も同時に進めなければならないという主旨である。今日の台湾にとっても「新南向政策」こそ全力を尽くして進める国家発展の施策の一つであるが、蘇峰の提言を通して、「南進」が如何に重要かを改めて反省させられたと同時に、蘇峰の、大学の設立は「屋上屋を架するのないように」という注意からも大いに示唆を得られるであろう。

## 五、おわりに

以上述べてきたように、蘇峰は『臺灣遊記』を通して、当時の台湾の重要な建設及び台湾文化の特徴や問題点を詳しく記録してくれた。ただ、旅行中に地元の一般の台湾民衆と接することもなく、自分の既成の殖産興業的な角度に拘っていたため、当時の総督府の台湾統治の問題点を軽んじたり、もっぱら在台日本人の意見を傾聴したりしてしまったという難点もないとは言えない。しかし、にもかかわらず、全体からすれば、蘇峰の『臺灣遊記』は有意義な旅行記だと言える。これを通して台湾は健康地で楽園だということも内地に伝えれば、蘇峰にとっては、自分の失脚による憂いをある程度晴らしてくれる役目も働いたと言えるのではなかろうか。さらに今日の台湾の発展の指針にとっても有意義な資料である。即ち、当時の台湾の建設の欠如及び有利な地理的環境、さらに南進にとっては学術的な研究が重要だという多方面からの指摘は今日の台湾の国家発展にとっても重要な示唆になるに違いない。

さらに、蘇峰にとっては個人的な旅行記である。が、17 世紀以降の欧州の大航海時代には、補給地としての海洋文化を有す台湾はその利点を余すところなく生かし、南進することで発展をし続けてきた歴史がある。台湾人にはこうしたものが経済活動の知恵として400 年も前から共有されてきたのである。つまり、蘇峰の指摘は台

臺灣大學藝術期刊資料庫

湾という社会集団の記憶にすっかり繋がっているのみならず、日台の相互理解には有意義な素材として存分に働いているとも言えるであろう。

**テキスト**

徳富猪一郎（1929）『台灣遊記』、民友社。
「年表・徳富蘇峰の生涯」（2015）『徳富蘇峰終戦後日記「頑蘇夢物語」』、講談社学術文庫。

**参考文献**

『番族慣習調査報告書』（1915-1917）臨時臺灣舊慣調査會、臺灣日日新報社。
森丑之助（1917）『臺灣蕃族志第一卷』臨時臺灣舊慣調査會、臺灣日日新報社。
『臺灣日日新報』1929.1.25、2.3—3.9。
『臺灣民報』1929.2.17。
『臺灣時報』1929.3。
「種族、體性及職業別人口（大正九年十月一日調）」（1930）「臺灣人口動態統計」、臺灣總督官房調査課。
『台灣總督府 警察沿革誌 第二冊』（1933）台灣總督府警務局、南天書局。
徳富猪一郎（1935）『蘇峰自伝』、中央公論社。
杉井六郎（1977）『徳富蘇峰の研究』、法政大学出版。
涂照彦（1993）『日本帝國主義下的台灣 第 1 卷』、人間出版。
近藤喜博（1996）『海外神社の史的研究』、大空社。
小島麗逸（2002）「日本帝國主義的台灣山地支配—到霧社蜂起事件為止」、戴國煇編『台灣霧社蜂起事件研究與資料(上)』、國史館。
楊智景（2003）「台湾表象の裏側のある〈日本〉探し——徳富蘇峰『台湾遊記』からの示唆」、『人間文化論叢』第 6 巻、お茶の水女子大

臺灣大學圖書館藏印章

学　大学院人間文化研究科。
藪田謙一郎（2003）『民友社とその時代――思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡――』ミネルヴァ書房。
檜山幸夫（2011）『帝国日本の展開と台湾』、創泉堂出版。
伊藤彌彦（2013）『維新革命社会と徳富蘇峰』、萌書房。
徐興慶（2014）「近代日本における徳富蘇峰の思想『轉向』をめぐって」、『近代東アジアのアポリア』国立台湾大学出版中心。
「台湾日治時期」
https://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%B0%E7%81%A3%E6%97%A5%E6%B2%BB%E6%99%82%E6%9C%9F#.E8.83.8C.E6.99.AF.E5.8F.8A.E9.81.8E.E7.A8.8B

臺灣大學學術期刊資料庫